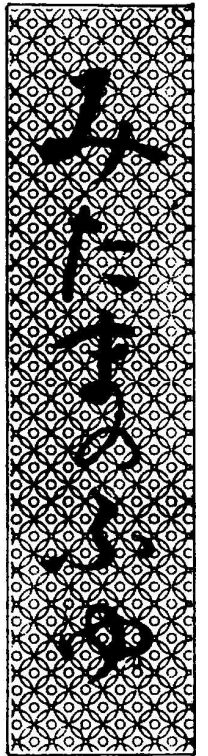


春の瀬戸神社社頭風景。神社前国道緑地帯の八重桜が開き、日に日に暖かさが増してゆきます。桜の「お花見」は古来から日本の伝統ですが、その背景には自然と人間の深いつながりもあります。（詳細は2面）



「みたまのふゆ」とは、私共が常に蒙りいただいている大神様の恩徳、加護、御神威を尊称した言葉です。人間は自分ひとりの力で生きてゐるのではなく、つねに「みたまのふゆ」をいただいで、生かされてゐるのです。

平成十七年度祭事暦

- ◎ 一月 一日 歳旦祭
鶏鳴神事
- ◎ 三月 二一日 春季大祭
祈年祭・合祀神例祭
- ◎ 五月 一五日 例大祭
神社本廳献幣使参向
琵琶島弁天社へ神輿渡御
- ◎ 六月 三十日 大祓式
- ◎ 大祓人形納め・茅の輪神事
- ◎ 七月 三日 天王祭出御祭
本社神輿御霊入・宮出渡御
- ◎ 七月 五日 三つ目神楽
- ◎ 無形文化財湯立て神楽
- ◎ 七月 一〇日 天王祭巡幸祭
天王神輿町内巡幸
- ◎ 七月 一七日 手子神社例祭
- ◎ 九月 一七日 熊野神社例祭
- ◎ 無形文化財湯立て神楽
- ◎ 一〇月 九日 手子神社秋祭
無形文化財湯立て神楽
- ◎ 十一月 一五日 七五三祭
- ◎ 十二月 二三日 秋季大祭
新嘗祭
- ◎ 十二月 八日 歳の市
開運熊手授与
- ◎ 十二月 二三日 天長祭
- ◎ 十二月 三一日 大祓式
- ◎ 大祓人形納め・古札焼納式
- ◎ 毎月 一日 月次祭

月例祭に皆さんご列席ありがとうございます。暖かくなって、だんだんお出かけもだいたいお楽になり、昨日が桜の開花宣言が出てましたね。ここ二、三年、桜が咲くのが早い時期が多かったのですが、今年は平年より一寸遅めのやうですが入学式などには恰度よい頃合になりました。

桜が咲いたといふと、上野公園が賑はつてとかの報道もテレビや新聞に必ずといってよいほどされますが、「お花見」というのがつきものですね。落語の中にも長屋の八つぁん、熊さんも花見をする話が出てきます。花見といふと、お酒を飲んで、歌を歌つて、楽しんでと、いはば娯楽のやうに現代人は考へえます。たぶん江戸時代ころから花見は人々の娯楽だったのでせう。

ところが、このやうに、お酒を飲んで、歌を歌つてといふのは、これは花見に限らないことですけれども、こんな伝統といふか習慣があるものといふのは、大体お祭りや繋がった由来があるものと見て大方間違ひないのです。

お祭りといふのは、神様をお招きして、神様と人間とが国会つて、そこで心を通はせて、その喜びの中で、お酒を飲み歌を歌ひ、踊りを踊つて、といふことが古来の基本的構造になつてゐます。通常、お祭りの儀式の中では、そのお酒を飲んだり歌つたりの部分を直会（なほらひ）と言つてゐます。

大体、町内のお祭りでも最後の方には必ずみんな集まつて酒を飲む習慣がついてるわけです。これを「鉢舐ひ」「鉢洗ひ」といふ言ひ方をす

宮司の講義する神道講座 「たぐひ」に見る日本の心（お花見とお祭り）

月次祭神道講話（四月一日の講話より）

ですね、一年間の豊饒を、稔りをもたらしつてくれる神様に、その神様が春になつて活動を始めるその時期に、お迎へして豊作や子孫繁栄を祈りたい。その神様と出会へる最も典型的な場所が桜の花の下なのです。その神様と出会ふために花の下へ行き、そして神様と一緒に宴会をする。そこにはお祓ひだとか、祝詞だとか玉串奉奠だとか今日の神社でのお祭りのような、儀式らしい儀式はないけれども、むしろ弥生か縄文の昔に遡るやうな古い形のお祭りの姿が残つてゐるんです。

お花見以外にも、そのやうに野外に出て何かをする習慣というのは他にもありました。例えば、百

ることもあります。ですから、お正月の行事にしる、御盆の行事にしる、日本中の昔からの色々な年中行事があり、飲食歌舞の習慣のあるものも多くありますけれども、その中でも「お花見」といふものには殊にさういふ要素が強く認められます。神様に国会ふたといふことは、どの神様と、何時、どこで国会ふかが肝心なことになるのです。昔の人の生活条件からすると、春の、これから田づくりを始める、そうした時期に

人一首の中に「春の野に出て若菜摘む」という「春の野」といふのが出てきますよね。万葉集には額田王の「野守は見ずや君が袖ふる」といふ歌がありますね。これは春ではなく実は夏の歌なのですが、野を守つてゐる番人を見てゐるよ、あなたが袖をふつてゐると、浮気してゐると疑はれますよ、とそういう内容の歌だとされてゐますけれども、大勢で野原に出てさうした行楽をする行事があつたことが判ります。

釜利谷町鎮座 手子神社

釜利谷町鎮守の手子神社は、もとこの地の領主伊丹左京亮が、文明五年（一四七三）瀬戸神社の御分霊を宮ヶ谷の地におまつりしたものです。

延宝七年（一六八〇）、伊丹氏の子孫、三河守昌家の子で、江戸浅草寺の智楽院忠蓮僧正が、現地に遷祀して以来、釜利谷一郷の総鎮守として信仰をあつめて来ました。

明治六年村社に列格、大正十二年の大震災で倒壊しましたが、同十五年再建し、昭和四十五年には御屋根も総銅板葺きに改修し、一段と御神威を加へました。

御祭神は瀬戸神社と同じく大山祇命、例祭日は七月十七日（現在はその後の日曜日）ですが、十月十五日の秋祭りには、古式豊かな湯立神楽が昔ながらの伝統を守つて行はれます。

境内の洞窟にお祀する竹生島弁才天は、金沢八景のひとつ「小泉の夜雨」の中心地にあつたもので、厄除け、開運の福神として信仰されてゐます。

このやうに春から夏になると、野原に出る行事がありました。秋には紅葉狩もありました。薬草を摘むためとか、そういう習慣だと古典の授業では一般に説明されますけれども、このやうな野外行事の基本は、特に春の野原に出ると、萌えてくる草花や、その中にこもっている大自然の一年の稔りをもたらす大きな霊気があるわけで、それを身にふりつける、それと一体になる。それにより自らの生命を若返らせ活性化することでした。その喜びがお祭りになるわけですね。

殊に、桜といふものの場合ですが、「さくら」の語源説には様々なものがあり、どれが正しいかは一概には言へませんが、その語源説の一つに、「さ」といふものの「くら」が「さくら」なんだといふ説があります。「くら」といふのは漢字で書くと「座」といふ字を書きます。座席の「座」です。馬の上の座席が「くら(鞍)」です。それから神様がお座りになるところを御神座と言いますが、これを古い言葉で「くら」といひます。すると、「さ」というものがいらつしやる「くら」いふう風が考へられます。それでは「さ」といふのは何かといふことになります。

「さ」といふ字が頭につく言葉には、田植えのときの用語にたくさん「さ」がつかます田植で植える苗を「早苗(さなえ)」と言います。それから、それを植える女性を「早乙女(さをとめ)」と言ひます。田植を終へた祝ひの行事を「さなぶり」といひます。これは「さのぼり(さ昇り)」で田の精霊である「さ」が天へ登る意味だといはれます。また「さ」には、吉永小百合の「さ」のやうに「ゆり」の上に「さ」がつく、田や米以外の草花につくものもあります。このやうに自然の草花の清らかな美しさ、その本質の無垢な清浄さ、その根源である自然の精霊、中でも豊かな稔りの象徴である米つくりの力の元となる魂、それを表してゐるのが「さ」だといはれてゐます。

さういつた、自然の中の神聖なものの、生命の根源に活力を与へる見えない力、さういふものが、桜の花の咲くときに大地に降りてくる。そして、その魂といひませうか、精霊そのものの鎮まる「座」になるのが「さくら」といふわけです。

桜が開くのはその精霊が降臨した証しとなります。その桜の花の下、すなはち精霊の降りてこられたその場所に行つて、その精霊と私たちも一体になる。かういふ昔ながらの、大自然と人間とが一体になる、花を通じて一体になる。そしてその生命力で私たちが生かされてゐる。さういふ気持ちがおそらく、この花見の宴の中にも、今でも無意識の中にも日本人の原体験として生きてゐるんだと思ひます。生きてゐるといっても、ほとんどの人がそれを知らずに、仲間同士で一緒に行く、その連帯感といひませうか、長屋では長屋の人間同士、大家さんと店子と一緒に、会社の花見だと、新入社員も含めて部長も課長も一緒になる。さういふ連帯感、地域の隣組なら隣組で、友達同士は友達同士のそのつながりを深めることをしてゐます。その原点にはかうした精霊と一体になることとのつながりの中に、真の連帯感があつたのです。

朝比奈町鎮座 熊野神社

社伝によれば、鎌倉に幕府を開いた源頼朝が、その東北の守りとして熊野三社をここに勧請したものとひます。仁治二年(一二四一)、鎌倉幕府は朝比奈切通しの開鑿に全力を挙げ、執権北條泰時は自ら現場に臨んで工事を指揮しました。社殿の建立もこの頃行はれたこととせう。

その後、元禄八年(一六九五)、地頭加藤太郎左衛門尉良勝が神殿を再建してから、里人の崇敬を集め、相模国鎌倉郡峠村の鎮守として崇敬されてきました。安永及び嘉永年間には再度の修築も行はれて、明治六年村社に列しました。

昭和五十三年、氏子一同の熱意を結集して、入母屋造、総檜、銅板葺きの本殿を完成し、さらに平成御大典記念事業として新たな拝殿を建築竣功して今日に至つてゐます。

御祭神は速玉男命、伊邪那岐命、伊邪那美命の三柱です。

例祭日は九月十七日、昔ながらの古式にのつとつた湯立神樂が今も続けられてゐます。

瀬戸神社略縁起

大昔、今の泥亀町、大川町、釜利谷町小泉のあたりまで海が入りこみ、柳町や六浦町の塩場、南六浦、内川町内もすべて海でした。そして洲崎と瀬戸の間は、潮の干満時には急流が渦を巻き、容易に渡れぬ難所でした。古代人がここに海神を祀ったのが瀬戸神社の起原で、今から千五百年以上も前（古墳時代）のことです。

治承四年（一一八〇）鎌倉に入った源頼朝が、日頃崇敬する伊豆三島明神をこの霊域に遷祀してからは、六浦港の守り神「瀬戸三島大明神」として鎌倉幕府をはじめ上下の尊信をあつめ、その後、足利氏、小田原北条氏の崇敬も篤く、江戸時代には名勝金沢八景の中心にあつて、百石の社領を有する大社として、江戸の町民の間にまで信仰者がひろがりました。

明治六年郷社に列格、戦後は宗教法人となり神奈川県神社廳勅幣使参向神社に指定されています。

現在の社殿は寛政十二年（一一八〇〇）の建造、御屋根は昭和四年の葺き替えになるものです。

御祭神

大山祇（おほやまつみ）の命

伊豆国三島大社、伊予国大三島の大山祇神社の御祭神と同じ海上交通の神であると同時に、水源地を司る山の神であり、金属、岩石、木材などの建築資材や、森林、鳥獣に至るまで、一切の生活資源は、この大神の恩徳によるものです。

天孫瓊杵尊の御后となられた木花咲耶姫の御父神にあられます。**須佐之男（すさのを）の命**

配祀の神の須佐之男命は、天照大神の御弟神で、八俣の大蛇を退治した神話は有名です。自然界、人間界の罪けがれや悪者を追い祓い、人々の苦しみを除いてお守りくださる神様で、別名を「天王さま」と仰がれています。七月の天王祭りには大神輿で氏子町内をくまなく御巡りになります。

菅原朝臣道真公

天満大自在天神とも尊称し、一般には「天神さま」と親しまれて呼ばれます。書道、学問、詩文、和歌に秀でておられただけでなく、至誠、尽忠、孝道、正義、国家鎮護の神さまでもいらつしやいます。

「ついでたち朝まいり」の御案内

瀬戸神社では、毎月一日、午前八時三十分より、「月次祭」（つきなみさい）を斎行し、国家安泰、天下平穩、氏子町内の皆々様の安全と隆昌を祈念いたしてゐをります。この「月次祭」に是非、多くの皆様に御参列下されたく御案内いたします。

記

一、毎月一日 午前八時三十分より。瀬戸神社拝殿。

（受付、昇殿は午前八時より致します。）

一、神事に引き続き、宮司の「神道講話」があります。

一、参列者には、「月次祭御幣」（家内安全・商売繁昌祈願、毎月御幣の色が異なります。十二ヶ月分皆勤の方には、年末に記念品を贈呈します。）を毎月授与いたします。

お初穂料一千元以上をお納め戴ければ有難く存じます。

一、どなたでも参加いただけます。

第二十八回伊勢神宮初詣で旅行

恒例の伊勢神宮初詣で旅行も本年で二十八回目。神宮では二十一年一度の式年遷宮があります。次の第六十二回は平成二十五年ですが、今年からこの遷宮に関する祭儀が始まります。明年は御木曳行事もあります。氏子の皆様と参加も計画したいと存じます。

<http://www.sengu.info/>を参照。



瀬戸神社

〒三三六〇〇二七
横浜市金沢区瀬戸十八ー十四

（電話）〇四五七〇一一九九二

（FAX）〇四五七〇一一九九四

<http://www.setojinja.or.jp>